第８回ぐんま青少年基本調査　報告書　＜概要版＞

令和６年６月
群馬県生活こども部

この概要版は、調査の目的及び主要な結果を簡潔にまとめたものです。報告書全体の内容を網羅しているわけではないため、詳細については、報告書本編を参照してください。

Ⅰ　調査実施の概要

１.調査の目的

近年、少子高齢化、インターネット・スマートフォン等の普及による情報化の急速な進展、コロナ禍等に伴い、青少年を取り巻く環境が著しく複雑化してきました。青少年及びその保護者の意識、生活、行動も大きく変化してきているなかで、児童虐待、いじめ、重大事件、貧困、ニート、ひきこもり、不登校など青少年の抱える問題も深刻化しており、より幅広い観点からの青少年育成推進への取組が求められています。

今回の調査は、家庭・学校・地域社会の各生活場面における青少年等の意識と行動を明らかにし、今後の青少年に対する施策のあり方について検討を行うための資料を得るとともに、「こども基本法第10条に規定する群馬県におけるこども施策についての計画」策定の基礎資料として活用するために実施するものです。

２.調査の実施状況

調査地域は群馬県全域で、対象者は小学校５年生、中学校２年生、高等学校２年生、教員、保護者、青年（18～29歳の勤労青年・学生）、相談機関等利用者です。

調査実施期間は令和５年１１月２０日～令和５年１２月２２日です。

Ⅱ　調査項目別結果

１.学校生活

（１）授業がおもしろいと感じている人は、中学生、高校生よりも小学生の方が多くなっています。
また、第７回調査と比較すると、授業がおもしろいと感じている割合は中高生で増加し、小学生ではほぼ同割合になっています。学校行事が楽しいと感じている割合は、各年代で増加しています。

（２）学校の規則に違反する服装で友達が登校した場合に、「まねたいと思う」と感じている人は、中高生ともに第７回調査よりも増加しています。

（３）学校で勉強をする理由は、小学生では「立派な大人になりたいから」、「大きくなったら好きな仕事をしたいから」、「知りたいことがたくさんあるから」が多く、第７回調査と同様の傾向が示されています。中高生では、「よい高校や大学に入るため」、「好きな仕事をしたいから」、「立派な大人になりたいから」が多くなっています。特に、中高生の「よい高校や大学に入るため」は第７回調査よりも増加しています。

（４）部活動やクラブ活動への参加は、中学生と高校生では、「参加していない」の割合が大きく異なり、中学生では、ほぼ全員が何らかの部活動やクラブ活動に参加している状況ですが、高校生では、２割が「参加していない」としています。第６回、第７回調査と比較すると、「スポーツ的な部活動」が減少傾向にあります。ただし、高校生では「スポーツ的な部活動」は減少していますが、「参加していない」の回答割合は減少傾向にあることを考慮すると、他の「文化的な部活動」等への参加が増加し、部活動に取り組む生徒自体の割合は、大きく減少していないと考えられます。

（5）友達との会話の内容は、小学生では「ゲームのこと」、「趣味のこと」が多くなっています。中高生では、「趣味のこと」、「友達のこと」の順に多くなっています。
第6回、第7回調査と比較すると、小学生の「ゲームのこと」が増加し、また、各年代で「趣味のこと」がおおきく増加しています。一方で、「テレビやマンガ、映画のこと」は各年代で減少しています。

（6）何でも打ち明けられる友達が「いる」と回答した割合は、各年代で7割を超えています。第6回、第7回調査と比較すると、高校生でやや減少しています。

（7）友達や周囲の人にどう思われているかは、小学生、中学生、高校生の各年代とも6割以上が「気になる」としています。

（8）友達や他の人と一緒にいる時に無理をしているかは、中学生、高校生の両年代ともに半分近くが、無理をしていると感じることがあるとしています。

（9）小学生が放課後に一番よく遊ぶ人は、「同じ学年の友だち」が最も多く、次いで「兄弟・姉妹」、「ひとり」の順です。第6回、第7回調査と比較すると、「同じ学年の友だち」の回答割合は減少傾向にありますが、「兄弟・姉妹」、「ひとり」の回答割合は増加傾向にあります。

（10）小学生が放課後遊ぶことが多い場所は、「家の中で遊ぶ」が5割台で最も多く、次いで「家の外で遊ぶ」、「ほとんど遊ばない」と続いています。第7回調査と比較すると、「家の中で遊ぶ」は第7回調査から増加している一方で、「学校で遊ぶ」は減少しています。

（11）新型コロナの影響で学校や友達との関係に変化があると回答した割合は、学年が上がるほど高くなっています。中学生、高校生では3割台が学校や友達との関係に変化があったとしています。

（12）新型コロナの影響で趣味や遊びに変化があると回答した割合は、学年が上がるほど高くなっています。中学生、高校生では4割台が趣味や遊びに変化があったとしています。

2.家庭生活・家庭教育

（1）両親との会話は、中高生に比べて小学生で多く、また小中高校生ともに父親よりも母親と多く会話しています。第6回、第7回調査と比較すると、小学生では、あいさつや言葉づかいなどや人の集まる場所で迷惑をかけないように父親や母親からいつも言われる人が減少しています。

（2）保護者が子どものことで悩みや不安に思っていることは、「勉強や進路に関すること」を約5割の人が回答しており、「生活態度や習慣、性格に関すること」、「携帯電話やインターネットの利用に関すること」も3割以上と多くなっています。

（3）家庭で身につけるべき重要なことは、保護者の回答では、「規則正しい生活習慣」、「あいさつや行儀、礼儀作法」、「食事や食生活」、「健康管理」、「ルールや決まりごとを守ること」が多くなっています。
教員も保護者同様に、「規則正しい生活習慣」、「あいさつや行儀、礼儀作法」、「食事や食生活」が多くなっています。しかし、「規則正しい生活習慣」は、保護者の回答では84.5%となっていますが、教員は小学校、中学校の教員では回答者の全員が挙げており、特に重要なことだと指摘されています。

（4）保護者に子どもとの1日の会話時間を聞いたところ、7割以上の人が、1時間程度以上会話すると回答しています。

（5）保護者に、子どもの生活習慣を聞いたところ、「食事の栄養バランスが悪い」、「就寝、起床時間が不規則」が多く、それぞれ約2割が回答しています。

（6）新型コロナの影響による家族や親戚との関係の変化は、各年代ともに3割前後が「そう思う」と感じています。

３．地域社会

（１）今住んでいるところが好きと回答した人は、小学生で９割以上となっています。大人になってからも今住んでいるところに住みたいと回答した人は、中高生で約 25%、青年で約５割となっています。

（２）地域活動への参加は、小学生では「いろいろなお祭りに参加する」、「季節の行事」、「地域の行事（各種のスポーツ大会など）」が多くなっています。中高生では「地域の行事（各種のスポーツ大会など）」、「道路や公園のそうじ」が多くなっています。
また、地域活動へ参加しない理由は、中学生、高校生ともに「興味がない」が多くなっています。中学生と高校生で「どこでなにをやっているかわからない」、青年で「時間やゆとり・体力がない」が増加しています。

（３）今までに参加したことのある体験は、小中高生では「海や川でおよいだこと」、「チョウやトンボやバッタなどの昆虫をつかまえたこと」、「歩いて山に登ったこと」が多くなっています。
一方、「自分の力で大きな木に登ったこと」は、教員の回答では、小学校の教員の 54.5%、中学校の教員の 78.3%が、自己肯定感を高めるために必要なことだと回答していますが、実際の経験は、中高生でいずれも４割以下、小学生、保護者（子どもが体験）でいずれも３割弱となっています。

（４）近所の人にあった時にいつもあいさつをする人は、小学生で７割強、中学生で６割強、高校生で５割弱となっています。
身体の不自由な人が困っているのを見かけた時に声をかけて手助けをする人は、小学生で７割弱、中高生で約４割となっており、小学生で第６回、第７回調査から増加傾向がみられています。

（５）ボランティアへの参加意思は、中学生と高校生では「わからない」と回答する割合が最も高く、青年では参加意思「ある」が最多です。過年度調査と比較すると、中学生では第７回調査で参加意思「ある」が増加していますが、全体的に減少傾向にあります。

（６）保護者における子育ての観点からの居住地域への満足度は、「満足」、「まあ満足」が６割強となっています。

（７）群馬県への居住意向は、高校生では「一度は県外に出ても、将来は群馬県に戻ってみたい」が最も多く、青年では「当分は住み続けたい」が最も多くなっています。
住みたいと思う理由は、高校生、青年ともに「慣れ親しんだ土地で生活したいから」が最も多くなっています。
一方で、住みたくないと思う理由は、高校生、青年ともに「都会で生活したいから」が最も多くなっています。

４．生活全般

（１）現在の生活の満足度は、小学生、中学生では「満足」が最も多く、高校生、青年は「やや満足」が最多です。学年が上がるにつれて満足とやや満足を合わせた割合が減少しています。過年度調査と比較すると、各年代で「満足」「やや満足」と回答した人の割合は増加傾向にあります。

（２）悩みや心配ごとは、小中高生で「勉強や進学のこと」が最も多く、中学生では５割弱となっています。青年では、「自分の将来のこと」が約３割となっています。
悩みや心配ごとの相談相手は、中高生、青年のいずれも「母」、「友達」が多くなっています。また「相談しない」は中学生の１割強、高校生、青年の約１割が回答しています。過年度調査と比較すると、各年代で「母」が増加傾向にあり、「友達」が減少傾向にあります。

（３）得意なものや自信のあるものは、小学生では「ゲーム」、「遊び」、「運動」、「友達思い」、「負けず嫌い」が多く、中高生では「遊び」、「運動」、「友達思い」、「負けず嫌い」が多くなっています。得意なものがない人は、小学生では 5.0%、中学生では約１割、高校生では約２割と、学年が上がるにつれ増加しています。

（4）規範意識については、小学生では全ての項目において「しないほうがよい」が9割前後となっています。
中学生では、「いやらしい雑誌や動画を見る」のみ、「してはいけない」が約4割と他に比べて低くなっています。
高校生では、「いやらしい雑誌や動画を見る」、「髪を染めたり脱色する」、「ピアスをする」を「してもよい」と回答した人が5割以上と他の項目に比べて高くなっています。
中学生、高校生ともに、「学校をさぼる」、「いやらしい雑誌や動画を見る」、「髪を染めたり脱色する」、「ピアスをする」、「タトゥー（入れ墨）を入れる」など多くの項目で「してもよい」と回答した人の割合は第7回調査よりも増加しています。

（5）誰かがいじめられた時の理想の対応について、小中高校生ともに「先生に知らせる」、「いじめている人たちにやめるようにいう」、「あとでいじめられた人をなぐさめる」が多くなっています。
自分がいじめられた時の実際の対応は、小学生では「いじめている人たちに『やめて』という」、「先生に知らせる」、「自分の親に知らせる」が多く、中高生では「友達に相談する」、「先生に知らせる」、「自分の親に知らせる」、「いじめている人たちに『やめて』という」が多くなっています。また、中高生では「自分の親に知らせる」が第7回調査から増加しています。

（6）学校に行きたくなかったことは、小学生の約5割、中学生の約6割、高校生の7割弱が「よくあった」、「1度または何度かあった」と回答しています。
学校に行きたくなかった理由は、各年代ともに「なんとなく」、「授業を受けたくなかった」が多くなっています。また、小学生では、「いじめられた」が第7回調査から減少しています。

（7）青年に希望する暮らし方を聞いたところ、「経済的な安定」、「好きなことや夢の実現」が4割弱と多くなっています。

（8）青年に出生率低下の要因を聞いたところ、「子育てにお金がかかりすぎるから」が約4割、「結婚年齢が上がったり、結婚しない人が増えたから」、「子どもより自分の人生を楽しみたいと考える人が増えたから」が約3割となっています。

（9）高校生に将来について不安に感じていることを聞いたところ、6割前後が「就職できるかどうか」、「経済的に困らないかどうか」と回答しています。

（10）高校生に将来結婚したいと思うかを聞いたところ、7割強が「結婚したい・どちらかといえば結婚したい」と回答しています。
結婚年齢への希望は、「３０歳くらいまで」が最も多くなっています。
自分自身の仕事と結婚・子育てについての希望については、「結婚し、子どもが生まれたら育児休業や時短勤務等の制度を活用して仕事を続けたい」が最も多くなっています。
また、将来のパートナーの仕事と結婚・子育てについての希望については、「結婚し、子どもが生まれたら育休制度等を活用して仕事を続けてほしい」が最も多くなっています。
結婚したくないと思う理由は、「自由な時間が減るから」が最も多くなっています。

（11）高校生に、将来的に何人子どもがほしいかを聞いたところ、「２人」が最も多くなっています。
子どもがいなくてもよいと思う理由は、「子育てに対して不安があるから」が最も多くなっています。

（12）高校生に、妊娠と年齢の関係について知っているかを聞いたところ、約8割が「知っている」と回答しています。

（13）高校生に、「ぐんま女性の健康・ぐんま妊娠ＳＯＳ」について知っているかを聞いたところ、6割強が「知らない」と回答しています。

（14）高校生に、家庭内での家事、育児、看護・介護の分担について聞いたところ、「男女で分担」が最も多くなっています。

(15) 高校生、青年に、行政に対して自身の意見が反映されている実感があるかを聞いたところ、高校生と青年ともに８割以上が「ない」と回答しています。

5.就労意識

（1）中高生に将来就きたい仕事を聞いたところ、「安定した生活が送れる職業」がそれぞれ２割強と多くなっています。また、「自分の能力や適性が生かせる職業」は第６回、第７回調査から減少傾向にあります。

（2）青年に現在の職場について聞いたところ、「満足」「やや満足」は合わせて５割弱、「普通」は３割強、「やや不満」「不満」が合わせて約２割となっています。
不満の理由については、「給料が安い」が約６割、「労働時間が長い」が４割強、「上司・同僚との人間関係」が４割弱となっています。

（3）青年に初めて就いた職業の働き方を聞いたところ、「正社員・正職員」は約９割と、第７回調査から増加し、「パート・アルバイト・非常勤職員」が減少しています。

（4）保護者に子どもの就労に対する考え方を聞いたところ、「自分がやりたいことなら転職しても良い」が、「安定した職場・職種に就くことが良い」を上回っています。過年度調査と比較すると、「自分がやりたいことなら転職しても良い」は増加傾向にあり、第７回調査結果から大幅に増加しています。一方、「安定した職場・職種に就くことが良い」、「一つの仕事をみつけてやりぬくことが良い」は減少傾向にあります。

6.インターネット

（1）小学生にスマートフォン等のインターネットができる端末を自分用に持っているか聞いたところ、６割強が持っていると回答しています。

（2）スマートフォン、タブレットの利用時間は、小学生の約２割が「１時間以上、２時間より少ない」と回答しています。中学生では約３割が「２時間以上、３時間より少ない」、高校生では３割強が「３時間以上、４時間より少ない」と回答しています。
第７回調査結果と比較すると、小学生、中学生、高校生のいずれも利用時間は増加する傾向にあります。

（3）インターネットで知り合った人とメールをしたり会ったりすることについて、保護者の７割強が「やめた方がいいと思う」と回答しているのに対し、中学生５割強、高校生は４割弱、青年は２割強にとどまっています。「普通に会ってもよいと思う」は、中学生で 4.5%、高校生で 12.4%ですが、青年では 33.5%となっています。

（4）ブログや SNS 等で自分に関する情報を発信することについては、「誰が見ているかわからないのでやめた方がよいと思う」は、保護者で約７割が回答しているのに対し、中学生では６割弱、高校生では４割強、青年では３割強にとどまっています。

7.若者の自立支援

（1）ひきこもりの経験について相談機関等利用者に聞いたところ、７割弱が「ある」と回答しています。「ある」と回答した人に期間を聞いたところ、回答者の約４割が３年以上の引きこもり期間があったと回答しています。また、引きこもりになったきっかけは、「人間関係の不信・不満」が約７割と高く、「不登校」も約６割の人が回答しています。

（2）家族との関係は、「時々衝突」が５割弱となっています。

（3）今やりたいこと、将来必要なことは、「仕事」が約９割と多く、「遊びや趣味」、「信頼できる相談者をみつけること」、「友達との交流」も５割以上が回答しています。

（4）今まで利用したことのある相談支援機関は、「ハローワーク・ジョブカフェ・地域若者サポートステーション等の就労支援機関」が約８割となっています。また、相談機関に求める支援は、「相談・カウンセリング的支援」、「就労支援」が９割前後と多くなっています。

（5）相談支援機関を利用する上で障害となることは、「どのような相談支援機関が利用できるかわからない」、「相談支援機関までの交通アクセスが不便」が５割前後と多くなっています。

８.自立について

中学生、高校生、青年、相談機関等利用者、保護者に「自立」とはどういう状態かを聞いたところ、各層で「親から経済的に独立すること」が最も多く、次いで、中学生では「就職や自営の職業生活をスタートすること」、高校生、保護者では「親から精神的に独立すること」、青年では「親から精神的に独立すること」と「特にはっきりした区切りはない」が同率で、相談機関等利用者では「親から精神的に独立すること」「就職や自営の職業生活をスタートすること」「特にはっきりした区切りはない」が同率で続きます。

９.行政が取り組むべき課題

保護者に、青少年の健全育成のため行政が取り組むべき課題を聞いたところ、「いじめ、自殺対策」が３割強と最も多く、「教育の質の向上」、「経済的支援の充実」も約３割となっています。

１０.教員からみた児童生徒の状況

（1）最近の児童生徒の特徴は、小学校の教員では「授業中落ち着かない子が多い」、中学校の教員では「自分の意見を言えない子が多い」が最も多くなっています。

（2）児童生徒に特に必要なものは、小学校、中学校の教員ともに「自ら学び、考え、行動する力」が多くなっています。小学校の教員では、「教科の基礎的な学力」、「自分で目標を立て、計画的に実行する力」、中学校の教員では「自分や周りの人の命を大切にする心」も多くなっています。

（3）家庭の経済状況により学力の差が生じているかについては、小学校の教員の 77.3%、中学校の教員の 82.6%が「学力差が生じている」と回答しています。
家庭の経済状況が自己肯定感の大きさに影響を及ぼしているかについては、小学校の教員の 72.7%、中学校の教員の 69.6%が「自己肯定感の大きさに影響している」と回答しています。

１１.新型コロナに関する質問との関係

（1）新型コロナの影響で学校や友達との関係に変化を感じたグループでは、登校意向の低下がみられます。また、小学生においては、変化を感じたグループでは、放課後一番よく遊ぶ人で「ひとり」の割合が、変化を感じなかったグループよりも高くなっています。

（2）新型コロナの影響で学校や友達との関係に変化を感じたグループでは、将来の夢や目標に対して変化が生じている子どもが一定数いることがうかがえます。